

モ ス ク ワ 滞 在 記

信州大理 勝 木 渥

§3. アナトーリィとボリスのこと

アナトーリィ Kondorsky の研究室では木曜日に研究室全体のコロキウムをやっている。

Kondorsky の研究室は一階玄関に入って右手の一带をずっと奥まで占めているが、コロキウムは5階の40人ほど入れる小講義室でやる。滞在中に、ぼくのやっていることについてレクチュアをやれという話が Kondorsky からあり、9月20日にそれをやることになった。玄関ホールには32ある各講座でのコロキウムの予定を掲示する大きな掲示板があるのだが、そこにぼくの名前と表題がロシア語で掲示された。

その前の週の土曜日は早目にホテルに帰ってホテルの散髪屋で散髪をした。日曜は休みだがそれ以外の日は夕方6時までやっている。散髪をしてくれるのは女の人である。すその方はバリカンでちょっと刈あげ、それから櫛と鋏を使って（日本だと鋏が細身でシャキッ、シャキッ、という感じだが、モスクワの鋏はもすこし小太りの感じでチョキン、チョキンと切る）すその方の形をととのえる所は日本のやり方と同じだが、頭の上の方の形をととのえるやり方は独特だ。まず櫛の歯に綿をからませる。櫛の歯の根元に綿がくいこむ。水道の蛇口をあけてその櫛をぬらす。綿が水を吸いこむ。それで髪の毛をくしけずる。櫛をぬらしてはくしけずる。それを何回かやって髪の毛をおちつかせる。ついで、剃刃（西洋剃刃）でサッサッと毛を削る。剃るのではない。そぎ落すのだ。前髪の伸びすぎた部分は鋏でジョキッと切り落した。そのあと後首筋をそってもらった。化粧水をつけるかときいたから、いらぬといった。散髪は30分たらずですみ、60カペイクであった（帰る前もう一度散髪をした。この時は後首筋を剃るのを省略して代金は40 Kであった）。このあとホテルのぼくの階のロビーでテレビをみたが、そこでは作家が自分の小説について一寸解説めいた話をし、その小説のいくつかの部分を生優たちが朗読していた。この地味なテレビ放送は、ぼくにある新鮮さを感じさせた。このところ久しく（10年もあるいは15年も）ぼくは小説であれ詩であれ、日本語で書かれたも

勝木 渥

のの朗読を聞いていない。

ぼくのレクチュアは3時に始まり、5時すぎに終わった。ぼくは、ぼくが信州大学へ移ってから寺尾君と2人で展開してきた磁気体積効果の Itinerant model による扱いの話をした。ぼくが英語で話し、一句切ごとに Vedyayev がロシア語に通訳してくれた。ぼくは久しぶりに自分の仕事のことをゆっくり時間をかけてしゃべることができたという、一種の満足感めいたものを久しぶりに味わった。考えてみると、こんなにゆっくり時間をかけて自分の仕事のことを、割合近い分野の仕事をしている人たちにむかってしゃべったことは、ここ数年の間ほとんどなかった。研究会の15分程度の持時間内での駆け足での報告、学会の5分講演または10分講演での断片的報告、こういう形でしか、ここ数年、ぼくらはぼくらの仕事について語っていなかった。

このレクチュアについて Kondorsky は「合金の問題をやるには CPA を用いねばならぬのではないか」とコメントし、また Sedov はわれわれのモデルによるスピン波の exchange stiffness の圧力依存性の解釈（これは論文にしてジャーナルに投稿してあったが2年以上もペンディング状態のままになっていた。ぼくの帰国後正式にボツになった）に強い関心を示した。（ぼくらの仕事については、他にも知っている人がいて、国際会議のある会場でたまたま隣合わせにすわったモスクワの鉄冶金研究所の Goman'kov はぼくの名札をのぞきこんで「お前は Katsuki か。お前のメンバーの連作Ⅰ～Ⅲをおれは読んだ」と言った。かれの名と父称の頭字が V. I. だったので、ぼくがそれを指しながら「ウラヂーミル・イリイッチ？」ときくと、ニヤッと笑いながら頭を振って「ニェット。ウラヂーミル・イヴァノヴィッチ」と答えた。）

レクチュアのあと、アナトーリイの家の夕食に招かれた。モスクワ大学はモスクワの西南部にあるが（地下鉄「大学駅」のあるキーロフ＝フルンゼン線は「大学駅」の2つ先が終点であるが、終点の駅の名は「ユーゴ・ザパードナヤ」文字通り「南西の」駅なのである。）、アナトーリイのアパートは大モスクワ市の東北端にある。アナトーリイの親友だというボリスも同行した。アナトーリイのアパートまでは大学から1時間半近くもかかった。大学から地下鉄「大学駅」までが徒歩15分くらい、地下鉄の所要時間が1回の乗換時間も含めて50分くらい（これだけ乗っても料金は5 Kである）、地下鉄の駅からアパートまでが徒歩で15分くらいである。アナトーリイのアパートのある一帯は日本でいえばマンモス団地で高層アパート群が林立している（ついでながら、「ユ

「ゴ・ザパードナヤ」も大マンモス団地のまん中にある地下鉄駅だった)。ここら一帯は森であったとアナトーリイは言う。ここかしこに森の名残りがのこっていた。地下鉄駅前の大通りには大きな食堂、食料品店等々がずらりと軒を並べており、道端にはキオスクが並んでいて、雑誌、雑貨、花、アイスクリーム等々を売っている。ボリスが訪問の手土産に箱入りのアイスクリームを数個買った。歩いてゆく途中、あそこが診療所、あれが幼稚園、これが小学校とアナトーリイがゆびさしながら数えてくれる、「ここには何でもそろっている。ないのは大学だけだ。ハッハッハッ」。

アナトーリイとしばらく前家族のことを話合ったことがあった。かれは33才。12才の娘があるという。聞きちがいかなと思って聞き直すと、かれはにっこり笑って「おれは非常に若い時に結婚した。大学4年生20才のとき結婚し、21才で父親になった」と答えたものだった。「奥さんは今何をしているか」と聞いてみたら、「モスクワのある工科系単科大学で物理を教えている」と答えた。非常に若く結婚し、すぐ子供を産んだ母親女子学生が育児のために物理を断念するというようなことはなくて済んだらしい。

3人乗ると満員になってしまう小型のエレベーター(壁に対して床が固定されておらず3人乗ったら床が少し下った)で9階か10階に着く。玄関の戸をあけると12才の娘さんが出て来てきれいな英語であいさつをした。ボリスがかの女は英語の学校へ通っているのだと教えてくれた。モスクワには普通の小学校とならんで、いろいろの種類——各種語学、数学、音楽、体育等——の早教育のための特殊学校があるらしい。奥さんも顔を出して英語であいさつをした。玄関に入って右手に3m×5mほどの居間があり、窓ぎわにアナトーリイの書棚とデスクが、反対側の壁ぎわに娘さんのベッドがおいてあった。テラスに通じるガラス戸越しにモスクワの夜景が美しく眺められた。部屋の真中にはテーブルがあり、壁の中央部には馬面の男の肖像画(黒白のデッサン)がかかっていた。ぼくらをこの部屋に案内してアナトーリイは座を外した。夕食の用意を手伝うためであるらしい。ボリスが肖像画を指して「誰だか知っているか」と聞いた。「知らぬ」「ドストエフスキだ」。やがてテーブルに食事を運んで来たアナトーリイが肖像画を指していった「誰だか分るか」ぼくはすまして「ドストエフスキだろう」と答えた。アナトーリイは大形に意外さと嬉しさを表わしながらいった「お前はドストエフスキを知っているのか。」「勿論。」ぼくはボリスと顔を見合わせ目くばせしながら、も一度「勿論」と答えた。(前に革命関係の博物館の入場料は無料だと書いたが、作家関係の

勝木 渥

博物館ではゴーリキイの家博物館とドストエフスキイ博物館が無料であり、トルストイ、プーシキン、チャーホフ関係の博物館は有料である。ゴーリキイがレーニンやロシヤ革命と深い関係があることはよく知られているが、ドストエフスキイ博物館が無料であることはソ連におけるドストエフスキイに対する評価と無関係ではないと思われる。のちにアナトーリイとボリスに直接たしかめてみたのであるが、かれらは2人ともソ連共産党員である。共産党員の家にドストエフスキイの肖像（レーニンの肖像ではなく）があったということが、ぼくには一寸面白かった。）

家は日本での2DKか3DKに相当する程度の広さのもので、窓は二重窓であり、セントラル・ヒーティングで、水道の蛇口をひねれば湯も出るようになっていた。アナトーリイによれば、アパートには2種あり、一つはたとえば大学に所属していて、そこに家賃を払って人が住むという方式のものであり、も一つは居住者が買いとる方式のものである。かれのアパートはこの後者の方で「おれは2,000ルーブリ（約74万円）支払ってこのアパートを買った」とかれは言った。「2,000Rといえば車と同じくらいではないか」「この国では車はもっと高い。なぜなら家は必需品であるが、車はまだぜいたく品であるから」それにしても2,000Rとは安すぎると思い、さらにききただしてみたら買取値段は総額5,000R（約185万円）でうち頭金の2,000Rを最初に即金で払い、残り3,000Rを月15Rずつ20年近くにわたって支払ってゆくのだとのことであった。「国がおれに3,000R貸してくれたわけだ」とアナトーリイはいった。ぼくが「ぼくは今、君のアパートとほぼ同じ広さの大学宿舎に月約15Rずつはらって住んでいるが、20年ほどさきに停年になったら、そこには住めなくなるのだ」という話をしたら、かれはそれを非常に深刻な問題として受取ったらしく帰国の前日に別れのあいさつをした時も「お前の住宅問題は非常にシリアスのようなものであるが、見通しはあるのか」と心配げな顔で言ってくれた。（のちに大使館の科学アタッシュェの人にきいた所では、ソ連での乗用車の値段は大衆車クラスで6,000Rくらいするらしい。）アナトーリイの月給は教員としてのそれが150R、研究者としてのそれが100R、合計250Rだとのことである（かれは助手である）。

夕食の時珍らしかったのは、きのこ料理があったことである。近所の森で自分たちで採って来たきのこだそうである。ボリスも一家でよく森へきのこ採りに行くが、ボリスは探すのがへたで奥さんや娘さんに比べて半分ほどしかよう採らんなどという話も出た。

ソ連でもカラー・テレビの放送が始まっているが、「お前のテレビはカラーか」とかれらが聞いた。「そうだ」とぼくはこたえた。若干の政治論議もした。国際共産主義運動のことも話題になった。「自分には西欧に新左翼の友人たちがいるが、かれらの運動方法は共産主義運動の方法ではない。毛イズムは国際共産主義運動を破壊するものだ」とアナトーリィ。「ソ連も中国も社会主義の国であり、世界における社会主義体制の成立・存在が第二次大戦後の世界史の動向を決定する基本的要因となっている。中・ソ対立の克服を望む」とぼく。アナトーリィもボリスも、「中国の経済体制が社会主義であることは勿論その通りだ。国際共産主義運動に分裂・破壊をもたらすようなやり方が問題なのだ」とこもごも言う。「ところで」とアナトーリィがいう、「日本共産党は中共派とそうでないのちに真二つに割れたのか」「否、中共派はごく少数で除名された」。アナトーリィが半ば安堵したような表情をみせてうなづいたので、ぼくは一言つけ加えた。「ソ連派もごく少数で除名された」。するとアナトーリィはややきつとした表情で言った、「国際共産主義運動にソ連派などというものはない。国際共産主義運動の原則に忠実であるか否かということがあるのだ。イタリア共産党にしろ、フランス共産党にしろ、いろいろの問題についてソ連共産党と見解を異にしている。かれらはソ連派ではない。しかし、国際共産主義運動の原則については一致しており、かれらもソ連共産党とともにこの原則に忠実である。ところで、日本共産党は国際共産主義運動の原則に忠実であるか」、これに対して、ぼくはある答をしたが、それをここに書くことは差控える。

9時になって、娘さんの寝る時間になったので、ぼくらは別室——食堂に移った。ボリスの手土産のアイスクリームや、クッキーやコーヒーを食べたり飲んだりしながら語りつづけた。勿論別室に移る前にアルコールも充分腹中におさめてあった。

ぼくは学生時代を思い出し、「国際学連の歌」のメロディを口ずさんでみた。（8年ほど前ロンドンで Wohlfarth の所にいた時、Wohlfarth が労働党の Wohlfarth の地区の選挙集会（ちょうど総選挙があった）に連れていってくれたことがあった。あとで Wohlfarth に労働党ではどんな労働歌を歌うのかときいたら、「赤旗」の歌を歌う、選挙で戸別訪問したりしたあと仲間と一緒にビールをのんだりしながら歌う、といってメロディを一寸口ずさんでくれたことがあったが、そのふしは、日本で歌っている「赤旗」の歌と同じであった。）アナトーリィの奥さんは女子学生のような表情で微笑むときれいな声でロシア語で唱和した。ぼくはとっても嬉しくなって、学生時代におぼえた

勝木 渥

いくつかの歌を口ずさんだ。ボリスもアナトーリィも一緒に歌った。かれらとかの女はロシヤ語で、ぼくは日本語で、いくつかの歌をいっしょに歌った。誰もぼくの歌を音痴だとも節が外れているともいわず（日本ではぼくの歌は聴く者にほとんど必ず音楽的不快感をもよおさせるらしいのだ）、同じ歌をロシヤ語と日本語で一緒に歌う喜びにひたっていた。……労働と生活のため、われらたたかわん、のちの世に戦争を、知らすことなかれ、子供らの自由に、伸びゆく世をつくらん、……

ボリス アナトーリィのことを「かれはおれの非常によい友人だ」というボリスは、アナトーリィの一年先輩で大学卒業が1962年、年令はアナトーリィより2つ上の35才だったが、萬事アナトーリィとは対照的であった。赤毛のアナトーリィがおしゃれで、きちんと手入れしたあごひげを生やし、背広に派手な幅広のネクタイをし、度の強い遠視の眼鏡をかけ、のべつまくなしに煙草を吸い、お茶やコーヒーは濃いのが好きなのに、対し、ボリスは大柄で頭が禿げており、背広は着ず、したがってネクタイもせず、大抵の時地味な色の（くすんだ色の、といった方が表現としてはより適切かも知れぬ）毛糸のセーターを無造作に着込んでおり、眼鏡もひげもなく、煙草も吸わない。お茶やコーヒーは淡いのが好きである。体が大きいくせに偏食の傾向もあるらしく、大学の食堂で一緒に食べた時も「おれは脂っこいものは苦手だ」といってハムの脂身を残し、「ドイツに滞在した時、食事に自分の嫌いなものばかり出てえらい苦労した」という話をした。

アナトーリィの家で愉快的な夜を過ぎた帰り道、「10月になったらおれの家に来ないか」とボリスは言った。翌日アナトーリィと会った時前夜の礼を言ったら「昨夜のようなプライベート・ミーティングをまたやる気はないか」とアナトーリィは言い、ぼくが「勿論、またやりたい」と答えると「今度はボリスの所でやろう」と言い、ぼくは10月初めにボリスのうちの夕食に招かれることになった。

ボリスのアパートは、大学からバスで10分ほどの所、モスフィルムの近くにある。今度はアナトーリィとぼくがお客だ。ボリスの住んでいる団地にも高層アパートが林立していた。ボリスもアナトーリィ同様、奥さんと娘さんとの三人暮らしである（もっともアナトーリィからは12月に二人目の娘が生まれたという年賀状を今年もったが）。奥さんは学校の音楽の先生、9才になるエレーナは音楽の学校に通っている。居間には中央にグランド・ピアノがおいてあり、右手の窓に近い側にテーブルとテレビ、書棚など、左手の奥の方にはエレーナの机やソファ、書棚などがおいてあった。奥さんもエレー

ナも英語はできないが、ボリスやアナトーリイを介して話したり、時には直接ぼくが片言のロシア語で語りかけたりして大変楽しい時をすごした。食卓の鉢には果物——りんご、ぶどう、杏——が盛られ、男たち3人はウォトカをボリス夫人はシェリーを、そしてエレナはアルコールぬきで、夕食をとり、食後にコーヒーとケーキを食べた。食事がすむとアナトーリイとエレナがチェスをし、つぎにぼくも一寸やってみたくなくてエレナ相手にやり、その間にボリス夫妻が食卓の上を片附けた。大人たちはふたたび食卓の前にもどり、エレナは自分の机に向って宿題をはじめた。ぼくがのぞいてみると、それは算数の宿題で問題に $3\text{ km } 675\text{ m} =$ と書いてあると右辺に 3.675 km という工合に答を書く宿題だった。そのような問題が10題ほど出ていた。ボリス夫人を含めて大人たちが食卓で話をしていると、エレナが「お母さん、ちょっと来てみてよ」と呼んだ。お母さんに教えてほしかったのかも知れない。あるいは大人たちが楽しそうに話をしているので、母親の気を自分の方にひいてみたかったのかも知れない。ボリス夫人が「自分でしなさいよ」と返事をする、エレナはそのまま大人しく一人で宿題をつづけた。母親から声をかけてもらって、それで満足したのだろう。エレナが寝てしまってから、ぼくとアナトーリイとでチェスをした。はじめアナトーリイが勝ち、次にぼくが勝った。むしろアナトーリイが敗けてくれたというべきかも知れない。夜更けて辞去するとボリスも送ってきてくれた。「君のホテルまで一緒に歩く気はないか」とかれらは言い、「歩こう」とぼくが答えて、ボリスのアパートからホテルまで約50分の道のりを一緒にあるいた。途中、一群の灯火がはるかに輝いているのが見渡せるような場所があった。「あれも亦、高層住宅群か」とぼくがきくと、かれらは「そうだ」と答えた。大モスクワ市を取巻いて一周約100kmの環状道路が走っている。大使館の科学アタッシェの人がアルハンゲリスコエへのドライブに誘ってくれた帰りに、この環状道路を半周ほど走ってみせてくれたが、この道路の辺りには殆ど家も大きな建物もない。大モスクワ市はこの都心部を中心にした半径20km弱の円内に完全におさまっているのだ。そして大モスクワ市の周辺部は林立する高層アパート群によって隈取られているということができそうだ。モスクワの星は澄んでおり、北極星がとても高い所にあった。3人がホテルの玄関についた時は真夜中の12時だった。ぼくらはそこで別れた。

ボリスは物理学部での活動的な、あるいは指導的な共産党員であるらしい。あるときボリスの研究室にボリスを訪ねていった時、かれは不在で同室の学生（あるいは技官？）

勝木 渥

がボリスは2階にいるといって案内してくれたのが共産党の物理学部の委員会の部屋だった。ボリス自身も数年前に2, 3年間大学のコムソモールの書記だか委員だかをしていたことがあると話したことがある。

ある日、ぼくがかれの研究室にいったとき、かれは机の上にプロGRESS社（モスクワの外国語文献発行所）発行の英語の本——その多くは共産主義関係の本であったが、中には Russian in Exercises という本もあった——を何冊か積みあげて「こんな本を読んでみる気はないか」という。「滞在期間が短くてとても読み切れぬ」と答えると「日本にもって帰って読めばよい」「荷物が重くなりすぎる」とその時は断った。ボリスのアパートに行ったときも、英語版のレーニン10巻選集1セットをぼくに見せて「もし、君が欲しいならこれをプレゼントする」とかれは言った。ぼくは「レーニンの本は日本語でも出ているから」とこの時も断った。ホテルへ帰って考えてみると、ぼくは社会主義・共産主義関係の本を、日本語でかかれたものをよんだり所有したりはしているが、外国語でかかれたものをもっていないし、読んだこともない。レーニンを英語で読んでみるのもまた面白いではないか、ついでにロシア語のものも入手したいと思って、翌日ボリスに「本はもらいたい。できたらロシア語のレーニン選集も手に入れたい」と言った。かれは次の週のはじめに早速英語の本はもってきてぼくにくれ、レーニンのロシア語版は「今探している。君の帰国までには入手できるだろう。できるだけよい版のものを手に入れるつもりだ」といった。結局堅い表紙のものは手に入らなかったが、紙表紙のパンフレット風のもの数点を入手しプレゼントしてくれた。このパンフはきわめて廉価で、例えば「国家について」が24頁で3 K（約11円）、「国家と革命」が160頁で18 K（約67円）、「人民の友とは何か」が224頁で28 K（約104円）といった工合であった。

かれは、とても気のよい男で何でも呉れたがる。本を呉れたのも、かれの Kommunizm を広く知らせたいという使命感もあるだろうが、それよりは多分にかれの気の良さに起因していると思われる。ぼくの帰国が間近に迫った10月15日にも、また夕飯を食いに来いとぼくを誘ってくれた。このときはアナトーリィは都合が悪くて、ぼくだけがお客によばれた。その前々日の土曜日、ひるめしと一緒に食堂にゆくべく誘ったが、その日はかなり寒くてみぞれまじりの冷たい雨が降っていた。食堂は物理学部とは別棟にある。ぼくはもともと帽子をもたずにモスクワに来たので、ずっと無帽ですごしていた。

10月も半ば近くになると無帽でいることは時にかなり身にこたえた。11月下旬まで滞在する予定の丹生さんは、10月早々ドル・ショップで上等の毛皮の帽子を手に入れたが、ドル・ショップで買っても安い物でも円になおして1万円近くするそうである。滞在予定も残り少なくなったぼくには、帽子にあまり金をかけるのはいかにもアンバランスに思えて、無帽で通していた。「君は帽子をかぶらぬのか」とボリスはききぼくは「傘があるから帽子はいらぬ」（折りたたみ式の傘をぼくはいつも鞆に入れていた）と答えた。食堂へゆくとき、ボリスは帽子をかぶらず傘ももたずにでてきた。ぼくのさしかける傘に半分かがむようにして身を寄せながらかれは言った、「おれは実は帽子をもっているんだが、君との連帯のために、今は帽子をかぶらずに来た」。食事によんでくれた15日の夕方、かれの家と一緒につくなり、かれは玄関わきの洋服ダンスからやや古くなった帽子をとり出して言った。「ぼくはこんなレーニンのかぶっていたような帽子をもっているんだが、君はこれをかぶるか」かぶってみたら、ややきつめだがかぶれた。それはかざりあごひものついた鳥打帽とでもいい形のもので、もっとも、鳥打帽のように前が下っているのではなく、むしろ学校の制帽のように前はあげてある。こんな帽子をかぶってレーニンが労働者と話している絵だか写真だかをどこかでみたことがあるような気がした。このいかにもロシヤ風なのが気に入って有難く頂戴することにした。かれは帽子が古いのを気にして「君の奥さんに見せる前に一度クリーニングしてくれ」としきりに言った。

ぼくを居間に案内すると、かれは夕食の準備を手伝うからと、すぐ姿を消した。あとはエレナがぼくを退屈させないようにと、かの女の切手のコレクションをみせてくれたり、絵本をもってきて見せてくれたりした。食事が始まるとエレナはボリスを介していろいろの質問をした。エレナは人なつっこい目でぼくの方をみながら、半ばはにかむようにボリスの耳元に口をよせて小声でボリスにいい、ボリスは小腰をかかめるような姿勢でうなづきながらそれをきき、一区切つくとそれをぼくにとりついだ。「娘はきいている、君のアパートの広さはどれくらいか、と」ぼくは即座に約59㎡とこたえた。ぼくのすまいは大学宿舎で広さをちゃんと知っていたからである。ボリスのアパートの広さを訊き直したら、それは約57㎡だとのことであった。エレナがまた何か質問をした。ボリスはそれをこう伝えた。「かの女は君のテレビはカラーかと訊いている」そしてぼくに向って大仰に片目をつぶってみせながらつけ加えた「勿論おれは君のテレ

勝木 渥

びが白黒であることを知っている。しかし、かの女が君のテレビはカラーかと訊いているので、かの女の質問を伝えるのである」。カラー・テレビは多分ソ連ではまだぜいたく品であり、きっとまだ高価なのであろう。子供に高価なものをねだられるときの親の心情はぼくにも理解できるから、ぼくに無帽の連帯を示してくれたボリスに、ぼくは親の連帯を示すことによって返礼した。「ぼくのテレビは白黒である」

夕食の肉料理には焼きじゃがいもがそえてあった。ぼくが肉の皿を平げたとき、ボリス夫人がボリスに何か言った。ボリスがそれを取次いだ。「じゃがいものお代りはないが、肉ならお代りがある。お代りをするか」ぼくはお代りをした。ボリスが半ば言訳をするようにつけ加えた。「肉を料理するのは簡単だがじゃがいもは洗って皮をむかねばならぬ。それで沢山つくれなかったのだ」。ボリス夫人は肉だけでなく煮たきのこの入った壺も一緒にもってきた。「きのこのお代りもあるからよかったらどうぞ」ぼくはお代りをして「うまい、うまい」というと、かれらは「みんな食べてもよい」という。とうとうぼくはまたお代りして、肉もきのこもみんな平げてしまった。ボリス夫人は嬉しそうにボリスに何か言った。ボリスが「かの女は料理をみんな食べてくれてありがとうといっている」といった。ぼくはとてもくつろいだ気持で食事できた。

食事がすむとボリスは小箱をもってきて、中味をじゃらじゃらとあけた。中からバッジがたくさん出てきた。ぼくは大学の中で赤旗とレーニンを取合わせたバッジをつけている学生をよく見かけていた。食堂の若い給仕でそのバッジをつけているのもいた。まちで博物館などで中学・高校生くらいの年頃の一団が団体で見学に来ている、その生徒たちの中にもそのバッジをつけているのがかなりいた。土産物屋などではユニバーシアード記念のバッジなどは売っていたが、この赤旗とレーニンを取合わせた、よく見かけるバッジは売っていなかった。多分コムソモール員のバッジであろうとは見当がついた。もし手に入れることができるなら、土産物屋では買えないこのバッジを手に入れたいものと思った。ボリスにたしかめてみたら、やはりコムソモール員のバッジであった。「そのバッジはおれももっているからそれをやる。おれのうちに来たとき、おれが忘れていたらバッジのことを言ってくれ」。その約束を覚えていて、かれの持っているバッジをもってきて店を広げたのである。ぼくが手に入れたがっていたコムソモールのバッジの他に、青地に白で中央館の尖塔のある建物をデザインしたモスクワ大学のバッジ、物理の頭字Φをデザインした物理学部の学生のバッジ、コムソモールに特別に貢献した

人がもらう特別のバッジ — コムソモールの普通のバッジに木の葉の飾りがついている — , その他いろんな記念バッジがあった。かれは、これらをみんなぼくに呉れるという。「それでは君のがなくなるではないか」とぼくが言ったら、「おれはバッジをつけたりするのは好きでない。総じてキンキラキンにかざり立てるのは嫌いだ。国民経済博の会場にある“人民友好の泉”の乙女の像(15の共和国を象徴する15の金色の乙女像が中央の噴水をとりまいて外向きに建っている)もおれは好かぬ」ボリスはおどけた形に両手を上にあげて(それは水がめを担った乙女の像のスタイルを真似たものだった)「こんな人形がよくサモワールの飾りについている」と顔をしかめて言った。ソ連の人間はバッジをつけるのが好きだという話がよくあるけれども、すべてそうだとは限らないのである。

ボリスの家でみたテレビではコマーシャルめいたものもやっていた。リズムカルにシーリヌィ, シーリヌィ, シーリヌィ(力強い)とくり返すので何かと思ったらステレオの宣伝だったり(辞書をひいてみたら, シーリヌィには「優秀な」という意味もあるから, そちらの意味かも知れぬが, ぼくはまず力を思いうかべてしまう), 亭主が食事そっちのけでテレビに夢中(ホッケーか何かの試合)で, 腹を立てた奥さんがテレビをやって持上げて家の外へ放り出してしまうコマーシャル, アニメーションもあった。この、場面の印象の方が強烈で何の宣伝だったか忘れてしまったが(ひょっとするとテレビの宣伝だったかも知れぬ)。それをみてボリスに「日本では新聞を読みながらめしを食って, 女房に新聞をとりあげられることがしばしばあるのだ」といったら, ボリスは「ソ連でも同じだ。ただしおれのうちのテレビは重いから女房には持上げられない。おれにしか持てない。だから飯を食いながらテレビを見ても大丈夫だ。アッハッハ」と豪快に笑った。もっとも「ソ連でも同じだ」というのが飯を食いながら新聞を読むことを意味しているのかどうか, さだかでない。ソ連で毎朝ないし毎夕新聞を宅配するのかどうか, ぼくはたしかめていない(8年前のロンドンでは宅配をしていた)。多分していないのではないかと思う。地下鉄駅の通路に新聞の自動販売機がずらりと並んでいて, 通勤客が金をほうり込んでガチャリ, ガチャリとレバーをおして新聞を買ってゆくのを, ぼくはよくみかけた。

エレナが食卓に子供の本をもってきた。「狼と七匹の仔羊」の絵本だったので「この話はぼくの娘も大変好きだ」という話をしたら, ボリスは「ではプレゼントするから,

勝木 渥

もってゆけ」という。エレーナがボリスに何か言った。ぼくが「エレーナがきっとこの本を非常に愛しているだろう」と言ったら、「気にするな、気にするな。かの女は本がよごれているので、そのことを気にしているのだ」とボリスはいい、とうとうぼくを、この本をもらう気にさせてしまった。他に何冊か子供の本をもってきて「よかったら、これもあげよう」という。ソ連の子供の本を手に入れるチャンスもありあるまいと思ったので遠慮せずにもらうことにした。これらの絵本はほぼA4版の大きさであった。例によって値段を書いておけば、この入学前の子供たちむけの「狼と七匹の仔山羊」が多色刷、紙表紙12頁で13K（1966年発行）、「イワン・イワノヴィッチと青い狼の物語」という低学年向きの童話絵本（むしろ挿絵のたくさん入った童話の本）が堅い表紙の多色刷、中の紙もやや厚目で80頁で1R14K（1972年発行）。他にモスクワの外国語図書出版所から出されたソヴィエト児童文学の英訳本——「小人の『知らん小僧』とその仲間たちの冒険」というほぼ同じ大きさの布表紙172頁の本——もあった。さきにふれたプログレス社発行の英語の本も同様であるが、これら外国語の本には価格の表示がない（ロシア語の本には裏表紙の外側上部に値段が表示されている）。物理学部の本のキオスクで、ぼくはきれいな色刷りの、入学前の子供向きの詩入りの絵本「馬が欲しいよ」を買ったが、これは紙表紙で20頁の本で値段が35K（1973年発行）であった。このような単行本の他に、ぼくの気付いた限りでは「楽しい絵本」という月刊の子供漫画雑誌がコムソモール中央委員会から発行されていた。これは表紙こみで20頁、値段は15Kだった。雑誌の紙質は単行本より軟かであった。ほんとうは、こういう絵本については、絵やら物語りやらについて説明をすべきなのであろうが、それは実物を見るに如かない。

辞去するとき、ボリス夫人は「是非またモスクワへいらっしゃい」と手をさしのべ、ぼくは「是非そうしたい」とこたえ「あなた方も、そしてアナトーリィたちも、機会があったら、ぜひ日本に来て下さい」とつけ加えた。

ぼくは、もらいたてのレーニン帽をかぶって夜の街路へ出た。このときもボリスはホテルまで送ってくれた（ただし、今度はバスで）。夜の街路は、ほとんど寒くはなかった。夕方ボリスと一緒にボリスの家へゆくべくバスを待っていたときは、日本の真冬の冷たさで顔がやや痛いと感じるくらいの寒さだったのだが。もらった帽子のせいだろうか、あるいはこの2ヶ月の滞在を通して、次第にしみ通ってくるように分ってきたロシ

ヤ人の心の暖かさのゆえであろうか、それとも夕食のときワインを充分にのんだ、そのほとぼりのゆえであろうか。

§ 4 動機と経過

最後になぜぼくが例外的な形でモスクワ大学への滞在を計画したか。それがどんな経過で実現したかを似たような計画をもつかも知れない人の参考のために書いておこう（興味の無い人は読まないで下さい）。

1973年の磁気国際会議がモスクワで開かれることを知ったとき、ぼくはそれに参加するだけでなく、できたらそのあとしばらくモスクワ大学の Kondorsky の研究室に滞在してインバー問題について少し議論してみたいと思った。同時に、物理の国際交流といっても日本のそれは欧米＝資本主義諸国とのそれに偏りすぎている、それは欧米諸国への日本からの留学にはいろいろ利用できるルートや基金があって、日本からの留学に関する限り「大衆的規模」で行われているといってもよいくらい広い道が開けているのに、社会主義国との交流はまだ狭い道しか開けていないせいでもある、一つ新しい道を開くことを試みてやろうという、いささかドン・キホーテめいた気持もぼくにはあった。

文部省の短期在外研究員制度を利用しようと思い、1971年11月に Kondorsky あてに「1973年8月から10月にかけて、磁気国際会議の期間を含んで2～3ヶ月貴研究室を訪問・滞在したいが、必要経費が日本政府から出るならその事は可能だろうか」との問合わせの手紙を出したが、これは梨のつぶてに終わった。翌72年4月3日に再び同文の手紙を出した所これには折返し4月18日付で Kondorsky から「費用が日本政府もちならば、国際会議後3ヶ月間モスクワ大学の磁気講座に滞在することの手筈をつけることは可能だと思う。歓迎する」旨の返事があった。この手紙をもとにしてぼくは昭和48年度の在外研究員の申請をし48年の4月中頃に大学本部を通じて文部省の承認の内示を得た。直ちに（4月中旬）その旨 Kondorsky に知らせる手紙を出したが、これは梨のつぶてであった。返信の来ぬまま渡航手続を進めているうちに、ソ連の査証をとるためには滞在中の住居が保証されていることが必要で、インツーリストのホテルを予約するか、またはモスクワ大学からの住居を提供する旨の正式の証明書が要ということが分った。5月22日その旨の連絡の手紙を出したが返信なし、重ねて6月16日にも同様の手紙を出したがこれも返信なしだった（実は Kondorsky は6月と7月に夏

勝木 渥

休みをとり、7月末までモスクワを留守にしていたのだった)。そこで旅行業者を通じてとりあえず10日分ホテルを予約したが、これが1泊30ルーブリという高価なものであった(1R $\cong$ 370円)(上記のような事情だったので国際会議の方へはホテルの申込をしなかった)。不審に思って業者にたしかめてみたら、ぼくのように1ヶ所に10日間もとどまるというのは観光旅行の範疇には入らず、商用旅行の範疇に属する、したがって商用旅行のホテル代金が適用されるとのことであった。この額はぼくに文部省から支給された滞在費一日分の約125%に相当するものであった。「大学が夏休み中なので9月1日以前には宿舎についての書類は送られない。国際会議にはインツォリストを通じて参加する方がよいだろう」とのKondorskyの電報を受取ったのが8月4日、そしてKondorskyの7月30日付の「8月には国際会議関係の仕事で忙しくなるので今年の休暇を6月と7月に繰上げてとった。君の5月22日付と6月16日付の手紙はモスクワに帰ってきてからつい2日前に読んだばかりだ。宿舎の手続はすぐとるが宿舎のことを決定するのは学長のスタッフなので多少時間がかかる。私が6月に大学を留守にしていたために君の訪問の手筈をととのえるのがおそくなってすまぬ」という手紙をうけとったのが8月6日であった。これを日本風の内定通知のようなものとしてうけとり、ただ時期的に書類が間に合わないだけなのだと思って、一応安心して国際会議に間に合うように出かけた。さて開会式当日、ようやく見付けたKondorskyに宿舎のことを聞いてみたら「学長スタッフは休暇中で8月末にならないとモスクワには帰って来ない。宿舎の提供に関する決定権は学長のところにありそれは自分の力の及ぶ範囲を超えている」ということで、ぼくは一時非常に気のもめる思いをした。国際会議の期間中にKondorskyがいろいろ努力してくれて、結局は、8月29日に宿舎の提供が承認された旨の知らせをKondorskyからもらうことができた。

こういう経過で、ともかく例外的な形での滞在が可能となった。宿舎提供の決定がぎりぎりまで延びたのは、Kondorskyの夏休みの繰上げといういわば“不慮の”事態と、国際会議とダブった時期にユニバーシアードがモスクワで開かれていてモスクワ大学関係の宿舎がそれへの参加者で超満員であったことが、特別の悪条件として作用したためかも知れない。もしこういうことがなければ、6月中くらいに宿舎提供の保証を得ることが可能だったのかも知れない。あるいは国際会議に出席して現地にいて、かなり切迫した状況でKondorskyに宿舎の件をせつついたことが、ぎりぎりになってからではあ

れ、ともかく宿舍の提供が認められることになった最大の要因であったのかも知れない。こういう形での滞在が可能だったことを強調しておきたい。

ぼくの滞在を「例外的な形」と書いたけれども、たまたま国際会議があったからこういう例外的なことが可能だったのか、実は例外でも何でもないのだけれども、今まで誰もこんな形でのソ連の大学への滞在を試みなかったから、それで例外的にみえるだけなのか、そこの所はちょっと分らない。